

雜 纂

英國の醫事狀況 (一)

好 本 節

吾國醫學は歐洲大戰前までは範を主として獨、埃、瑞の諸國即ち所謂逸語國にとつた爲其等諸國の醫況は吾々に比較的よく紹介されて居た、又先頃の歐洲大戰中は外國留學或は視察に向つた醫家の多くは米國に赴いた結果米國に於ける醫況も近頃吾國に紹介され出した、所が歐米先進國の中でも英、佛、伊諸國に於ける狀況は餘り傳へられてない様であるから私が先般英國在留中に見聞した醫事狀況に就て茲に少し述べることにした、尤も私は此方面に特に注意を拂つて取調べたことはないので従つて大略を紹介するまで、又中には多少の誤りもあるかも知れぬが讀者は狀況の概略を覗ひ知らることが出来ると思ふ。

醫育に就て申すと醫學校（私がこゝに醫學校と稱するは醫學生を教育して醫師を養成する醫育機關を指すのである）の數は合計約三十四で地方に二十一首都ロンドンに十三存在してゐる此の十三校の中三校は基礎科授業を又一校は臨牀科授業を他校にて受けさす制度になつてゐる即ち全課程授業の約半部を他に託することになつてゐるから數に於て十三とは申すものと實際の量に於ては十一校に相當するとも謂ひ得る、併し斯く算しても可なり多い數である、之を吾國の其れと較べると首都東京には五校、殖民地等を除きたる日本内地々方に十七校（將來開校の筈である北海道大學醫學部は除く）で數に於て英國の方が優つてゐる、一寸申添へて置くが國土の廣さと人口との割合ひ

に於ては日英兩國其の本土に就ては大略互に似てをるのである。又英國はイングランド及びウェールズ、スコットランド、アイルランドの諸邦が寄つて形成されてを而して之等が英國の多くの屬領、殖民地に對して本土と稱し得らるのである。

之等學校はケンブリッヂ大學を除く外は男女共學でロンドンとクラスゴの兩市には女子のみを收容するものが又二つ宛ある、但し此種學校にあつても臨牀科の大部分は他校にて男學生と共に教授を受けるから絶對的の女醫學校はないのである、但し男女共學の學校にあつても或る種の學科産科即ち婦人科學の如きものだけは男女別々に教授する制をとつてをるものもある、これは男女性を異にした學生を共にして學科とは申せ下がかつたことを攻究するは遠慮すべきであるとの理由に因ることである。

學校は醫育統一制度のもとにあつて日本に見る如き大學と醫專校と云ふ如き著しき區別は先づないと謂ひ得る、大多數は綜合大學の一學部として存在してをる、ロンドンの如き十三校あるが其の殆んど全部はロンドン大學の學部であつて換言するとロンドン大學には斯く多數の醫學部がある譯けである、又綜合大學の醫學部として存するもの以外にイングランド、スコットランド及びアイルランドに各々王立醫科大學 (The Royal College of Physicians, The Royal College of Surgeons) なるものがあつて之等は綜合大學の醫學部に對し別に Medical Corporations と稱せられてをる此の種の學校は單科大學に先づ相當するものとも謂へる、綜合大學の今日の如く發達しない以前殊にイングランドに於ては醫學生の多くは之に向つたものであるが大學の發達と共に醫學生の多くは綜合大學醫學部の方を選ぶ様の傾向になつた、設備其他に於て概して稍や劣る所がある様である又校舎等も充分整つてをらず授業等の或る部分を他に託し試験のみを行ふこともあるのである、斯くの如く學校には大學醫學部と Medical Corporations との二種に先づ分ち得るが各學校何れも同資格で概言せば統一されたと謂ひ得る醫育を行つてゐるのである、併し學校により實際の優劣あるは申すまでもない優秀なるものもあれば又他方には比較的劣つたものもある。

醫學生數は大戦前は一箇年に約千四百人餘り學校に進入して居つたのであるが、戦時中約二千人餘りに増加し一昨年即ち戦争終了翌年には更に増して三千五百人程の新入學者を算ふるに至つた、戦時中學生數の増加は女學生の増したのが其の因であるとのことで、又戦後學生數の増加は單に醫學校に於てのみでなく中學程度より高等の諸學校何れも同様増加してをる、此の理由は、大戦中戰役従事の爲學業を中止してゐた青年が戦後一時に殺到し來つたからである、何れの學校も大入り滿員で又學校當局者も事情が事情であるから之等青年を收容する爲に出來得る限りの便宜方法遣り繰りをつけて收容してをる、斯かる狀況で目下の醫學生數は中々多く昨年一月の調査表によると總計九千五百人程即ち約一萬に近い數である、日本内地醫學校に年々進入する學生數の確たるものを私は知らぬが先づ千五六百人位を推し又總學生數を六千五百人内外位と推算すると此の數は英國に於ける戦前の學生數に大略近似してをる、英國現時の學生數増加は戦後一時の變態と目すべきであるから之とは比較すべきでないから日英兩國は學生數に於て似て居ると云ひ得る併し學校數に於ては英國は吾國の其れよりも約二倍で従つて一校の平均學生數は遙に少く約半數とも云へるが學生數なるものは學校によつて大に相違があつて吾國の學校に於けるよりも相違が遙に著しい、併し何れにせよ吾國の學校は其の實際の收容能力以上に無理をして多數を容れてをることは遺憾ながら否むことの出來ぬ事實である。

醫育を受けむとする者は或る程度の普通學を終了したるものたるべきことは申すまでもない、醫學修業に要する準備智識が充分具備されあるや否やを檢する爲學校自ら入學試験を行ふ學校もあるが然らずとも既往の學歴が充分なりと認められ得る者には入學資格を與へる處が多い、醫學々習を始めるに要するとせられる準備智識の程度は吾國高等學校卒業程度より少しく低い、又大學法、文、理科等の學修に向つて要する準備智識程度より醫科の其れは更に少し低いのである尤も醫學校入學後最初の一年は物理化學博物學等の普通學を學習することになつてをるが醫學の如き學術を修むる者に向つては其れに要する準備智識程度を更に高むる要あることが近來所々より唱へられて

ゐる、私は今入學試験なる語を用ひたが之は入學志望者が果して醫學修業に要する相當豫備智識を有してをるや否やを検する意味の試験であつて吾國諸學校に於て行はれある如き入學制限の手段としての試験ではないのである、従つて彼の國の學生は入學に於ては吾國學生の經驗する如き憂き身は免がれてゐる次第である。

醫師資格を得るには吾國の其れと別に大した差異はない、但し其の手續きに於て少し異つてゐる、それは醫學修業を開始した者は早速醫事總顧問會 (The General Medical Council) に届出で醫學修業開始の旨最初に登録するを要する點である之を The Student's Register と稱する、此の手續きを執つた後少なくとも五年間を認定醫學校に過し規定の課程を修め終末試験を通過したものには醫師資格が授與され醫師として登録されるのである、醫事總顧問會とは一つの法定團體であつて醫家、醫學校代表者及び樞密顧問官等より選出された二十八委員より成り醫事登録醫育に關した事を司るのである。

醫學修業者は滿十六歳以上たることが規定され年限は最短五箇年にして規定全課程を修了し得ることになつてゐる、併し之は少なくとも五箇年を要すと云ふ意味にとつた方が適切で萬事好都合に何等故障なく修業進行せば兎も角、左なくば其れ以上の期間を要するのである、吾國の年限たる四年に比して一年長いのであるが實は初め一年間は Primary Study と稱して化學、物理、博物學等を専修するのであるから吾國高等學校課程の或部を修める譯で實際吾國で意味する醫學科の修業年限は等しく四箇年である、此の四年の中初め二箇年は解剖、生理學等所謂基礎醫學科 (之を The intermediate Study と稱す) を又次の二箇年は主として臨牀諸學科 (之を The Final Study と稱す) を又此の最後の二箇年の中最終の一箇年は主として臨牀實地修業に割當てられてをる、大略斯く割當てられてはあるが學年制度ではなく大略學科制度であるから學生は都合に依つては此の割當て以外多少繰延ばし融通を付け得るのである、尤も Primary Study を修了するに非ずば Intermediate Study を修むることが出來ぬとか又之を濟まじた後でなくば Final Study に就くを許可せぬ等の規定は一般にあるのである、而して規定全課程を修了し制規の試験

を通過するは M.B. 及び Ch(或は S).B (Bachelor of medicine and Surgery) なる Degree を得同時に醫師たるの資格を得るのである。又 Medical Corporations の方にも L.R.C.P 或は M.R.C.S (Licentiate of the Royal College of Physicians, Member of the Royal College of Surgeons) なる Diploma を得るは醫師たるの資格を得ることと同様である。此の Degree も Diploma も何れも醫師たるの資格を得るには同等であるが近時は前者を得るものが多くなつてゐる。Degree 及び Diploma に就ては少し説明を要するが便宜上後に述べよう。

修學に關し吾國に於けると多少異つてゐる點を擧げると修學は全課程を通じて同一の學校で修めずとも課程の或る部分は他校に在つて修むるも可と云ふ如き便宜も許されてゐる但し之には相當の制限があつて初め一箇年は他校にて修むるも可なるが次の三箇年は自校にて、又臨牀實習のみは學校が承認したる他の病院にて修むるも可と云ふ如き或は之に類する條件制限を以てしてをり何れも自由制度による弊を防いでをる、彼の有名なる オックスフォード 並に ケムブリッジ 大學等の如き全課程を其大學に於て學修し得るも大學所在地たる オックスフォード とか ケムブリッジ は何分にも極く小都市であるから臨牀材料の如き大都市所在の學校に比し不充分なるを免れぬから轉學の自由を利用し ロンドン 等の大都市に來つて臨牀科を便宜學修するものが多い従つて斯かる場合誠に便利なのである、轉學の自由なる事は主義に於てはよい事であるが之は設備其他實施上には可なりの不便をも伴ひ易いものであらう併し吾國に於ける制度は餘り窮屈ではあるまいか或る程度範圍内に於て多少融通のつく便宜を設くるは悪くはなからう。

學科に於ては麻醉、結核、公衆衛生等は獨立して講せられてをる麻醉の如き重要なものではあるが吾國の醫學課程に於ては餘り重きを置いて居らなかつた觀がある、公衆衛生に就ては特に此の修了證を有する者に非ずば人口五萬以上を有する行政區域に衛生吏たる事が出來ぬとの規定がある位である、講義實習等の如き日本に於ける其等も餘り大差はないが實習の如きは吾國に於けるよりも遙に重きを置いてやつて居る様である、之は結構な事で誠に斯くありたいが吾國醫專校に於ける如く實に僅な經費で遣り繰りを行ひつゝ辛うじて經營し而も實際の收容能力以

上に收容し其の上學生からは充分の實習費用を徴收し得ぬ如き状態では右の如き望みは現實し得られぬのである。

試験は可なり嚴重に行はれて居る模様である、實習或は實地試験に於ても同様である、再試験の憂身をみる學生も少なくない、試験は各學科修了後其れ／＼行はれるが更に基礎學科修了後吾國前期試験に相當する Intermediate Examinations 及び臨牀科終了後吾國後期試験に準ずる Final Examinations を通過せねばならぬ而して之を通過せば前述の如く Degree 又は Diploma を得同時に醫師たるの資格を得るのである、今申した主なる試験に際しての試験委員は全部必ずしも當該學校の教官とは限らず他校の教官も來つて委員となる即ち斯の如き制は獨逸等に行はれてをる所の學校修了後更に國定試験を受けて醫師資格を得る制度と吾國に於ける如きたゞ自校の教官のみによつて試験を受け之により直に資格を獲得する制度との中間制とも稱してよからう。

修學五箇年間に於ける費用は學校により多少相違はあるも授業料實習料等直接學校に支拂ふ費用が約千五百圓乃至二千圓中には吾國學校にありては必要とせぬ受験料等も含まれてゐる、此等費用に五年間の衣食住萬端の費用を加ふると約一萬五千圓(大戰前は約一萬圓)を要すると概算されてをる、尤も學校に直接支拂ふべきもの以外の費用は學生箇々の生活程度如何により可なりの相違あるは勿論である、要するに吾國に於ける學修費用に比せば遙に多額を要し約四倍程ではないかと思ふ、富の程度の高き國柄とは申せ可なりの資産がなくては醫學修業は出來ぬ譯である、併し各學校には獎學資金とか之に準すべき便宜が中々多いから特別の場合學生は費用を節減することも出来る。

學生卒業後は先づ如何なる方面に向ふかと云ふと申すまでもなく多くは大病院等に助手を勤め暫く實地修業に取りかゝる、吾國に於けると同様彼等の最希望する處は自己修業學校の實習機關として用ひられをる病院等に助手となることである併し之等にあつては助手に定員あり而も其數は割合少なく多數の志望者を收容し得ぬから多くの者はそれ／＼他の病院に向ふのである、吾國にあつては無給助手、副手等の名目で學校附屬病院に可なり多數の卒業生を收容することが出来るので此の點に於ては都合がよい譯である、又卒業生の少數は更に特種の研究に進む之も

吾國に於けると同様である。

英國現在の醫師供給需要關係は大戦後四、五年間は供給が必要に對し多少不充分なる状態にあると謂ひ得るのである、大戦中多數の醫師は軍醫として従軍し可なりの死傷があつた、衛生部將校の死傷は歩兵科將校に次で多かつたこのことである、又上級學生の中では學業を中止して従軍した等のこともあつて一時醫師輩出數が減じた、元來醫師養成には相當長期を要し又醫師の缺乏は公衆の保健上憂ふべき結果を來す恐れがあるから當局も醫育の如きは成るべく中斷せしめぬ様學生の修學も繼續さす方針を大戦の後半頃より執つたのであるが女醫の供給は兎も角男醫の其れは不足の状態にあると申してよい、世界各地に散在せる廣大なる殖民地屬領等からも需要は盛んにある。

女醫に就て述べるとケムブリッジ大學醫科を除く外は何れも女醫學生の入學を許可し男女共學であり又ロンドン及びグラスゴーには女醫學校がある、殊に歐洲大戦開始以來女醫學生數は大に増し戦争終了の年に於ては男女兩學生數の割合は三對一又或る所にあつては二對一位の割合になつてをつた、而して女醫は大戦中男醫不足の爲之に代り國內に於て種々の位置を得て活動して居つた併し今後男醫の多數が社會に送り出されると現今の女醫學生は卒業の曉に相當就職難を味はひはせぬかと或る一部からは杞憂されてをる、次に英國に於ける女醫の歴史は餘り古いものではなく以前は吾國同様各學校が女學生を收容しなかつたので有志の婦人連は醫育に於ても男子同様の特權を得むと長時にわたり努力した結果今日の状態に達し得たのである、殊に歐洲大戦争を機として更に羽翼を延ばしたとも謂ひ得る、今より六十年前一英國婦人が北米合衆國で醫學修業を了へ歸國ロンドンにて開業したのが此の國に於ける女醫の最初であつたことである、其れより後十五年即ち今より四十五年前頃十四人の女學生を集め醫育を開始したのが女子醫育の濫觴であつて、醫事顧問會で女醫登録を正式に受附ける様になつたのは其れより約二年後即ち今を去る四十三年前程に過ぎない、之に續いて徐々に各學校が女子に向つて門戸を開き初めたのである、女權の盛んな英國にあつても門戸開放は餘り古いものではないが併し吾國の醫育機關も最早女子に向つて門戸を閉ぢて居る時期であるまい。(以下次號に譲る)